

硬膜外麻酔を用いて出産した褥婦の出産体験

鎌田 奈津

要 旨

【目的】

硬膜外麻酔を用いた無痛分娩での産婦の出産体験を明らかにすることを目的とした。

【方法】

合併症がなく、正期産で生児を硬膜外麻酔を用いて経膣分娩で出産し、他の病院などへ児が緊急搬送されていない、本研究に同意の得られた女性10名を対象に、半構成的面接を行い、得られたデータを質的に分析した。

【結果】

研究協力者の概要は、年齢は29歳から39歳で平均32.5歳、初産婦4名、1回経産婦5名、2回経産婦1名だった。

研究協力者の出産体験は、麻酔導入後の分娩第1期は、明らかに痛みがなくなった【痛みの消失】や、痛みがなくなったことによる【余裕・冷静】を体験し、多くは【待つという体験】と、【陣痛を経験】、【痛みのコントロール】をしていた。分娩第2期は、【産みたい感覚】、【児が出てくる視覚的感覚】、【産み出す行為】、【児が出てくる身体的感覚】、【自分で産んだ実感】、【産み出した実感のなさ】、【産まれたことを確認】を体験していた。

【考察】

硬膜外麻酔を用いて出産した産婦にとっては、痛みがないことが出産体験を肯定する重要な要素となっていた。また、痛みによる体力の消耗がなかったことで、出産後すぐに育児に取り組むことが可能になると考えられた。

【産みたい感覚】、【児が出てくる視覚的感覚】、【産み出す行為】、【児が出てくる身体的感覚】といった、児が出てくる感覚や産み出す行為が、【自分で産んだ実感】につながるわけではなく、自分の体に感じる収縮の感覚を頼りにいきむという行為が、自分で産んだ実感を得ることにつながると考えられた。

キーワード：出産体験、無痛分娩、硬膜外麻酔

I. はじめに

今日の出産現場では、最先端の高度医療を受けることが出来る施設での出産を望む女性もいれば、医療介入のない自然な出産を望む女性もいる。また、産痛はなくてはならないものと肯定的に捉える女性がいる一方、陣痛に伴う痛みを耐え難い痛みとして脅威を感じ、麻酔薬を使用した無痛分娩を希望する女性もいる。

日本での経膣分娩の出産体験は、陣痛を耐え、乗り越えた安堵感や解放感、達成感などを感じたこと、また、母児共に健康で自分で産んだ子どもと対面した感動や喜びや、一緒に出産を体験した夫への思いがあり、出産体験を自己成長の体験ととらえている者が多い^{1) 2) 3)}。一方、痛みうまく対応できずパニックになってしまったことや、呼吸法やいきみができなかった事により、体験を否定的に捉えて、出産体験に満足感を得ることができない女性もいる^{1) 4)}。また、帝王切開分娩では、「経膣分娩が自然の摂理」や「陣痛の痛みを体験してこそその母親」という考えが、出産後の母親としての感情に影響し、分娩後に自己不全感をもたらし出産体験を否定的に受け止めてしまうことがある^{5) 6)}。

欧米諸国では、硬膜外麻酔を用いた無痛分娩はスタンダードであり、90%以上の産婦が硬膜外麻酔による無痛分娩を選択し、麻酔の産痛除去の効果が分娩の満足度にかかわると報告されている⁷⁾。また、硬膜外麻酔を用いた分娩と自然分娩で、分娩体験や、子どもに対する感情に違いがないことが明らかにされている⁸⁾。日本でも、麻酔分娩を方針としている施設で出産した女性のほうが、自然分娩を方針としている施設で出産した女性よりも、出産体験を肯定的に受け止めている者が多く、胎児感情にはそれぞれに有意差がなかったという報告がある⁹⁾。しかし、無痛分娩による出産体験の具体的内容の報告は少ない。そこで、本研究は硬膜外麻酔を用いた無痛分娩での出産体験を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

研究デザインは、半構成的面接法を用いた質的記述的研究である。

2. 対象

研究協力施設は、硬膜外麻酔を用いた分娩を方針とする産科診療所で、本研究に協力することに同意の得られた1施設である。研究協力者は、合併症がなく、正期産で生児を硬膜外麻酔を用いて経膣分娩で出産し、他の病院などへ児が緊急搬送されていない、本研究に同意の得られた女性10名である。

3. 調査方法

1) データ収集方法

研究協力の同意が得られた褥婦の産後2日目に、「今回の出産を振り返ってお産の始まりから赤ちゃんが出てくる間でのお話を、覚えているだけ話していただけますか?」という問いかけで開始する半構造化面接を実施した。実施に当たり、褥婦の体調を考慮しながら、都合のよい時間と場所を研究協力者と相談し決定した。インタビュー時には、内容をICレコーダーに録音およびメモをしてインタビューデータとした。1回の時間は約60分前後とし、研究協力者が話し終えない場合は話し終えるまでとした。研究協力者の年齢や分娩の既往、分娩所要時間、児の出生時の体重といった基本情報はインタビューの中で研究協力者から聴取したが、不明な点は診療録から収集した。インタビュー後は、速やかに逐語録を作成し、内容を繰り返して読み、不明な点は、退院までに研究協力者に確認した。

2) データ収集期間

インタビューは、平成21年8月1日～10月31日の約3か月間実施した。

4. データ分析方法

得られたデータは、指導教員の指導の下で、「硬膜外麻酔を用いて出産した褥婦の出産体験」が明らかになるように質的に分析した。

5. 倫理的配慮

本研究は、兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所研究倫理委員会の承認を得て行った。研究協力者には研究趣旨と研究方法、研究参加は自由意志であり同意しない場合でも不利益は受けないこと、匿名性の保持、

データの厳重保管と適切な処分について文書と口頭で説明した。また、研究結果の公表を明示した。

Ⅲ. 結 果

1. 研究協力者の概要（表1）

研究協力者の年齢は29歳から39歳で平均32.5歳である。初産婦4名、1回経産婦5名、2回経産婦1名だった。分娩所要時間は3時間58分から40時間33分であり、分娩誘発をした研究協力者は4名で6名が陣痛発来による分娩であった。児の出生時体重は2,832gから3,492gであった。経産婦の前回の出産で、硬膜外麻酔を用いた無痛分娩をしていた者は5名でD氏のみ自然分娩であった。今回の出産は、10名全員が妊娠中から硬膜外麻酔による無痛分娩を希望していた。

2. 研究協力者の出産体験

本報告では、麻酔導入後の分娩第1期と分娩第2期の出産体験、今回の出産体験に対する本人の捉え、研究協力者の属性による体験の違いについて述べる。2人以上が体験している内容は【 】で示し、個人特有の体験はくゝで示した。「 」は協力者自身の語りを示す。

1) 麻酔導入後の分娩第1期の体験の状況

麻酔導入後の分娩第1期の体験は、図1に示すように【痛みの消失】、【余裕・冷静】、【待つという体験】、【陣痛を体験】、【痛みをコントロール】であった。D氏は、

この時期の体験を語らなかった。以下に、それぞれの具体的内容を説明する。

麻酔の導入により【痛みの消失】を体験したのは、A氏、C氏、G氏、I氏の4名であった。A氏は、「15分経たないうちに痛みが消えた」、C氏は、「そこからは別にもう、天国の」、「天国と地獄でした」、G氏は「もうほんとに無痛、無痛になって」、I氏は「薬が入るとやっぱり陣痛の痛さっていうのが嘘のようになって」と、それぞれ痛みがなくなったことを述べた。

【余裕・冷静】を体験したのは、A氏とC氏であった。A氏は、「効いたので、そこから、あのう比較的落ち着いて過ごせて」、C氏は、「後は何事もなかったかのように、嘘のように看護婦さんとしゃべってて」、「麻酔がああ、効いてから」、「冷静やったので」と述べた。A氏とC氏は、痛みがなくなったことによって気持ちに余裕ができ、冷静になることができたことを語り、痛みがなくなったことによる気持ちを述べた。

【待つという体験】は、A氏、B氏、E氏、F氏、G氏、H氏、I氏の6名が語った。待つ状況はさまざまであり、A氏とE氏は、子どもが産まれてくるのを待ち、B氏、F氏、G氏、H氏、I氏は分娩の進行を待った。A氏は、「親二人でこう、進むのかな、まだかなあって言いながら子どもの相手をしてた」、「いよいよだよおっという雰囲気、その時を一緒に待とうねって」と述べ、家族と一緒に子どもが産まれてくるのを待っていた。E氏は、「ただ赤ちゃんが降りてくるのを待ってたって感じ」と述べ、ただ子どもが産まれてくるのを待っていた。B氏は、「もうどうなるのかなって感じで」、「ここで寝てようって感じ」、「メールとかジュース飲んだりとかしてました」と述べ、なかなか分娩が進行せず医師から帝王切開の可能性を説明される中、ただ分娩進行を待っていた。F氏は、「ただ寝て、痛いのごまかしてた」、「どうでもいいような話をしてました、うん、気を紛らわすじゃないけど」と、麻酔が切れる時に感じる痛みをごまかしながら、「いつまでこれが続くのかな」という思いを持ちながら過ごしていた。G氏は、「ただひたすら、こう、お産が進むのを待ってた感じ」と、ただ分娩の進行を待った。H氏は、「ちょっとノートにつけてたんですけど」、「ずっと寝てました」と、痛みを感じた時間と麻酔を追加した時間を記録しながら、分娩の進行を待つ

表1 対象者の属性

ケース番号	分娩既往	年齢	分娩所要時間	出生時体重
A	1回経産婦	31	7時間59分	2,832 g
B	初産婦	35	33時間37分	3,004 g
C	1回経産婦	31	9時間4分	2,936 g
D	1回経産婦	30	3時間58分	3,492 g
E	2回経産婦	30	5時間4分	3,136 g
F	初産婦	32	13時間41分	3,414 g
G	初産婦	29	17時間50分	3,334 g
H	初産婦	34	40時間33分	2,906 g
I	1回経産婦	34	4時間57分	3,300 g
J	1回経産婦	39	5時間36分	2,950 g

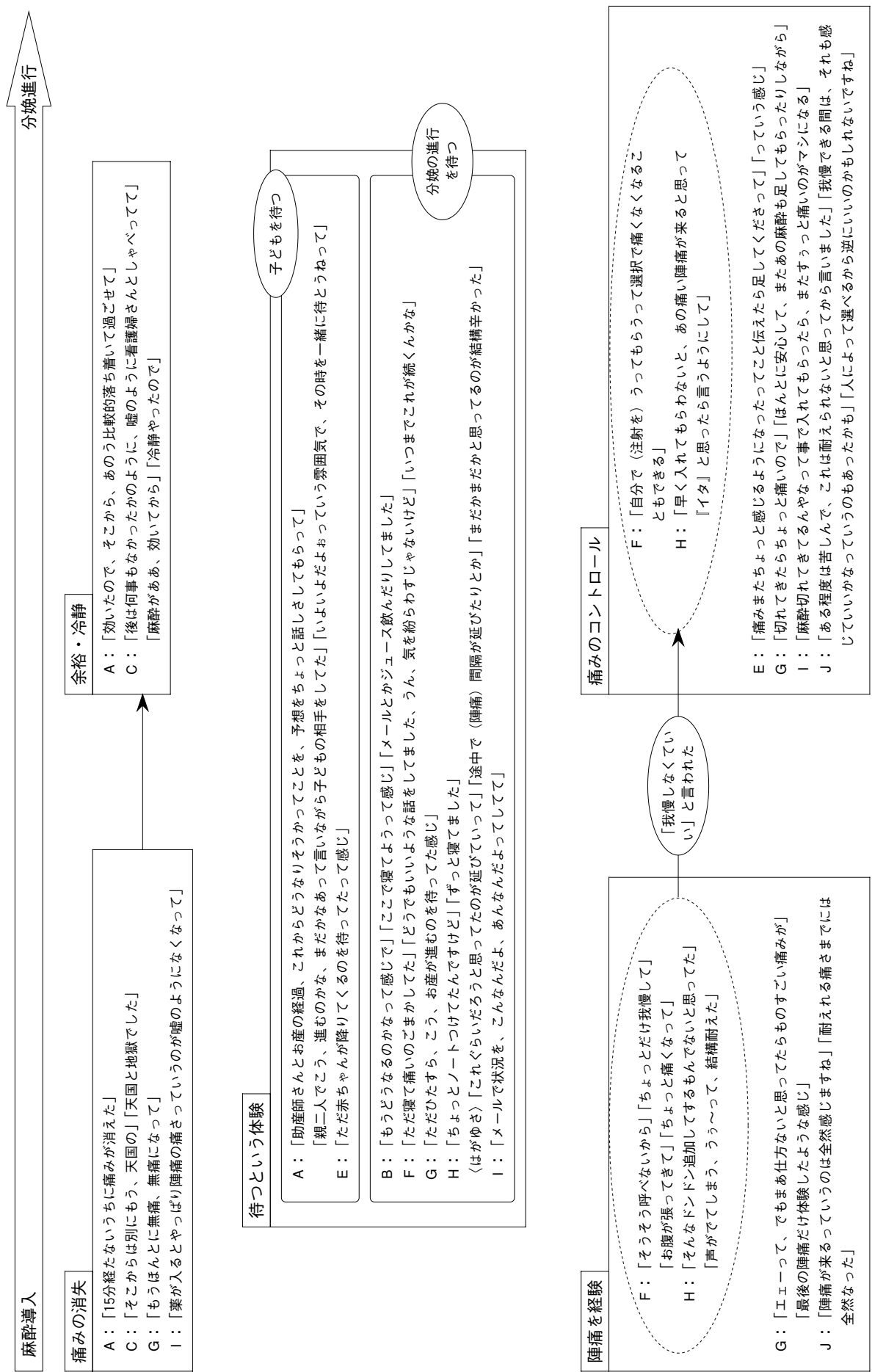


図 1 麻酔導入後の分娩第 1 期の体験

いた。その中で〈はがゆさ〉についても語り、「(児出生時間が)これぐらいだろうと思っていたのが延びていて」、「途中で(陣痛)間隔が延びたりとか」、「まだかまだかと思ってるのが結構辛かった」と、自分が産まれるだろうと思っていた時間が過ぎ、思うように陣痛も来なかったことを述べた。I氏は、「メールで状況を、こんなだよ、あんなんだよってしてて」と、家族にメールで分娩進行の状況を報告しながら過ごしていた。

【陣痛を経験】を体験として述べたのは、F氏、H氏、G氏、J氏の4名であった。F氏は、「お腹が張ってきて」、「ちょっと痛くなって」と痛みを感じても、「そうそう呼べないから」、「ちょっとだけ我慢して」と、医療者に対する遠慮から痛みを我慢し、陣痛を経験していた。H氏は、「そんなドンドン追加するもんでないと思っていた」、「声が出てしまう、うう～って、結構耐えた」と、除痛に関する思い違いから痛みを我慢し、陣痛を経験していた。G氏は、分娩経過中、胎児の心音が低下したために一時的に麻酔を中止したことで、「エエーって、でもまあ仕方ないと思ったらものすごい痛みが」、「一番最後の陣痛だけ経験したような感じ」と、一時的ではあるが、麻酔が切れたことにより強い痛みを感じ、陣痛を経験していた。J氏は、「陣痛が来るっていうのは感じますね」、「耐えられる痛さまではなってたって感じ」と耐えられる程度の痛さで、陣痛を経験していた。

【痛みのコントロール】という体験は、E氏、F氏、G氏、H氏、I氏、J氏の6名が語った。そのうち、F氏とH氏は、医療者から我慢しなくてもよいという説明を受けたことによって、【痛みのコントロール】ができるようになっていた。F氏は「自分で(注射を)打ってもらうって選択で痛くなくなることができる」と、自分で痛みをコントロールできたことを述べ、H氏は、「早く入れてもらわないと、あの痛い陣痛が来るとして、『イタ』と思ったら言うようにして」と、痛みを感じないように、コントロールしていた。E氏は、「痛みまたちょっと感じるようになったってこと伝えたら足してくださってって感じ」、G氏は、「切れてきたらちょっと痛いので」、「ほんとに安心して、またあの麻酔を足してもらったりしながら」、I氏は、「麻酔切れてきてるんやなって事で入れてもらったら、またすうっと痛いのがマシになる」と、それぞれ痛みを感じたタイミングで麻酔を追加して

痛みをなくしていた。J氏は、「ある程度は苦しんで、これは耐えられないと思ってから言いました」、「我慢できる間は、それを感じていいかなっていうのもあったかも」、「人によって選べるから逆にいいのかもしれないですね」と述べ、意図的に我慢できる程度の痛みを感じるようにコントロールしていた。

2) 分娩第2期の体験の状況

分娩第2期の体験は、分娩第2期前半と、産み出す時、児娩出時の3つに分けた。図2に示すように、分娩第2期前半は、【産みたい感覚】と〈予想外にお産になる〉という体験が示された。産み出す時は、【児が出てくる視覚的感覚】、【産み出す行為】、【児が出てくる身体的感覚】と、〈助けなく子どもが出てきた〉、〈児への不安〉が語られた。児娩出時の体験は、【自分で産んだ実感】、【産み出した実感のなさ】、【産まれたことを確認】が語られた。ここでは、それぞれの具体的な体験の内容を説明する。

【産みたい感覚】はA氏とI氏の2名が語った。A氏は、「おっきいものが、下に出たがってる感じ」、「いきんでしまいたいっていうあれを今回は結構分かった」、I氏は、「子どもが下がってきてるといって何かこう力みなくなる」、「何か来てるなっていうのは分かるんです」と述べ、子どもが降りてくる感覚や、いきみたい感覚を体験していた。〈予想外にお産になる〉という体験をしたB氏は、「開いてきますよって言われても、たぶんそんな3時間後に全開になるとは思ってなかった」、「あっという間にお産って感じ」と述べ、分娩がなかなか進行しないことで、このままでは帝王切開の可能性あることを分娩経過中に数回にわたり説明されていたことから、予想外にお産が進んだという体験を述べた。

産み出す時の【児が出てくる視覚的感覚】は、A氏、B氏、C氏、I氏、J氏の5名が体験した。A氏は、「(鏡で見ますって言ったら、黒い髪の毛が見えてて」、「ここに赤ちゃんがいるんだっていうのをすごく分かって」と述べ、子どもの存在を現実のものとして捉えていた。B氏は、「あの鏡で見て、あっここまで来てる」と述べ、子どもの下降を確認していた。C氏は、「頭がのぞいているのを見て」、「鏡は単に『おお』って」と、頭が出てきていることを視覚的にとらえていた。

【産み出す行為】は、A氏、B氏、C氏、D氏、G氏、H氏、I氏の7名が体験した。子どもを産み出すために、いきむ、力を入れるという体験はそれぞれ異なっていた。A氏は、「いきんでみたら『ああ上手上手』ってゆっていただいて」、「感じる収縮の感覚だけを頼りに」と、自分で子宮収縮を感じていきみ、うまくいった体験を述べた。B氏は、「きばれって言われても感覚無いのに」、「でもきばれたんですね」と、感覚がない中でも、いきむことができた体験を述べた。C氏は、「鏡を見ながら」、「いきんで」と、鏡で出てくる子どもの頭を見ながらいきんだ体験を述べた。D氏は、「いきむタイミングも分からなくて」、「看護婦さんが『じゃあちょっと息吐いて』って言われて、吐いていきんだ」と、タイミングが分からないため指示通りにいきんだ体験であった。G氏は、「ほんとに難しくって」、「意識したら、こう、グツと」、「今かなあって勝手に思って、お尻上げたりして」と、意識して自分の感覚でいきむタイミングを探し、自分でいきもうと試みていた。またG氏は、「なんかこう、うまく出てこなくて」、「赤ちゃん大丈夫かな」と述べ、いきんでも児娩出にいたらないことで、〈児への不安〉も語った。H氏とI氏は、「皆さんが説明して下さったとおりにやれば、ちゃんと力を入れることができた」、「指示通りしているだけで、もう何がなんだか分からないからとりあえず力んでって感じ」と、とにかく指示通りいきんだことを述べた。

E氏は、「スルッと自力で出てきたんで、この子は」、「上の子はちょっと引っ張る」、「こう切ったり」、「切らなかったんですよ、この度」と、上の子は引っ張られて産まれたが今回は助けなく子どもが出てきたと捉え〈助けなく子どもが出てきた〉と述べた。

【児が出てくる身体的感覚】は、C氏、D氏、E氏、F氏、G氏、H氏、J氏の7名が体験したが、子どもが出てくる感覚の捉え方や表現は異なった。C氏は、「ニュルンていうのは分かるんです」、「体のところしか分からない」、G氏は、「体だけズルズルズルっと出た感じの感覚だけあって」と述べ、子どもが出た感覚の表現は異なるが、軀幹が出る感覚だけを語った。D氏は、「引っ張り出されるときの感覚はモゾモゾっと」と引っ張り出されたという感覚を述べた。E氏は、「今出て来てるなっていうのは分かります」、「うううん難しい」と、出てくる

感覚について具体的には語られなかったが、子どもが出てくる感覚は分かっていた。F氏は、「なんかすっきりしたのが分かりました」、「ドロッと感じ」と、その感覚を述べた。H氏は、「挟んでる感覚が無くなった感覚で、出たって思った」と述べ、出てくる感覚ではなく、それまであった感覚がなくなったことで、子どもが出てきたと捉えていた。J氏は、「ただ出るって感じはすごく分かる」、「ククッと割とすんなり出てきたって感じ」と、子どもがすんなり出て来た感覚を述べた。

児娩出時の【自分で産んだ実感】は、A氏、G氏の2名が語った。A氏は、「こう、自分で頑張って、こう産んで、なんか、あっ産んだっていう実感を味わえた」、「出産を体験したぞって気持ちが、すごく満足だった」と、自分で頑張って産んだことで自分で産んだ実感を持ち、出産を体験したという気持ちを持って満足だったと述べた。G氏は、「ああ私は出産したと思いました」、「痛みはなくてもやっぱり出産ですごい、あの大事ななって」、「やっぱり相当いきまないと出てこないじゃないですか」、「そういういきんで出てきたところ」と、相当いきんで、子どもが出て来たことで出産したと語った。

【産み出した実感のなさ】は、B氏、D氏、F氏、I氏の4名が語った。B氏は、「フーだけで出るのって思ったら、もう出てた」、「いきなり赤ちゃんが来た」、D氏は、「全く何も分からないまま産まれてきた」、「気がついたらもうこの辺に頭が」、F氏は、「頭がね、ちょっと出てるって言った時も全然分からないくらいほんと普通だった」、「産んでる感覚ではなかった」、I氏は、「フツてやったら『ほら出てきた』って言われて、『あああ』て」、「その辺はあんまり覚えてない」と、B氏とD氏、F氏は児が産まれた感覚はなく、いきなり赤ちゃんがやってきた体験であった。

【産まれたことの確認】は、C氏、D氏、E氏の3名が語った。C氏は、「鏡見ながら冷静に出て来たっていうのが見える」、D氏は、「『体を起こしてごらん』って言われて、ちょっと起こして、こう出る瞬間を見れてた」、「はっ出産したんだな」と、子どもが出てくるところを見て、視覚的に出産した事を確認していた。E氏は、「鏡が見えるより先に声がね、やっぱり聞こえるんで」、「実感というか産まれたというか」と、産まれた子どもの声を聞くことで、聴覚で産まれたことを確認した。

3) 今回の出産体験に対する本人の捉え

今回の出産体験に対して、10名全員が、「よかった」・「楽だった」と語った。その内容は、【痛みがなかったこと】、【体が楽だったこと】、【元気に子どもを産めたこと】、〈安心できたこと〉であった。以下に、それぞれの具体的内容を説明する。

【痛みがなかったこと】を語ったのは、A氏、B氏、C氏、F氏、G氏、H氏、I氏の7名であった。7名のうちA氏、H氏、F氏の3名が、その具体的な内容を語った。A氏は、「本気で（痛みを）味わったら、『たすけて〜』って自分のことでいっぱいになってたと思う」、「子どもの事を、考えられるくらいの気持ちでいられた」、「子どもを産むと、むしろ会えた事で、すごい、ほんとに嬉しいって思えたから」と、分娩経過中は子どもの事を考えながら過ごすことができ、その子どもに会えたことで嬉しいと思えたことと、「皆が、ほんとうに逃げたいほどの苦しみやったって、いう体験をしている中で、私は、一つずつがすごい新鮮で、よく覚えてることのほうが多かったんで」と、分娩経過中の体験や出来事を詳細に覚えている事ができたことを述べ、「それは多分痛くなかったからじゃないかなあと」と痛みがなかったことでよかった・楽だったと語った。H氏も、「よかったと思うのは、無痛で痛みを軽減できたのが一番よかった」と述べ、「ちょっとだけ味わった陣痛が、結構痛くてしんどかったんで、そんな痛い経験をわざわざしなくても無痛で楽に産んで、ちゃんと体力も残しておけるほうが母親のためにもなるし子どものためにもなる」と、痛みなく楽に産むことで体力を残すことができることと、「私の場合時間が長かったんで、精神的負担っていうか、そういう意味でも痛みがないほうが（よかった）」と、精神的負担が軽減できたことを語った。F氏は、「痛くなかった」、「陣痛もほとんど自分でコントロールできてたらあれだけど、自分で打ってもらって選択で痛くなくなることができる」と、自分でコントロールして、痛みをなくすことができたことがよかったと述べた。

【体が楽だったこと】で、D氏、E氏、J氏の3名がよかったと語った。D氏は、「やっぱり母体、母親が楽ですね。すぐに子どもの世話が出来る気がしました。」「前（の出産）は、2日ほど動けない、手すりがないと立てない歩けないやった」と、前回の出産と比較し、

すぐに子どもの世話ができるくらい体が楽だったと述べた。E氏も、「皆さんと比べて、たぶんもっと楽かな、無痛分娩されてる中でもたぶん楽で安産なお産だったんじゃないかな」、「母子共に体が楽に産まれてくるっていうこと」と、自分は他の人より楽な出産だったと捉え、体が楽であることがよかったと述べられた。J氏は、「お産が楽、楽って言う内容は苦しまずにすむ」、「今回はうまくスツといったので、それ（疲れ）もきっと少ないんじゃないですかね」、「（出産の）後から赤ちゃんと接していられたりとか」と、苦しまずにすんだことで疲れが少なく、出産後すぐ子どもに接することが出来たことを語った。

【元気に子どもを産めたこと】は、D氏、G氏、J氏の3名が語った。D氏は、「結果よかったと思っています」、「NICUとかに入らずに、もう、産まれたその日から、普通にしてるこの子が見れるとうれしいですね」、「今回は元気に産めたかなあって」と、前回の出産では子どもが出生直後NICUに入院した経験から、今回は子どもを元気に産むことができたことがよかったと捉えていた。G氏は、「無事に赤ちゃんが出てきたこと」、J氏は、「赤ちゃんが五体満足に産まれてよかったなっていうのが一番です」と、健康な児を得たことを語った。

〈安心できた〉と述べたJ氏は、「私の体験としては、すごく安心して出来たのでよかった」、「害っていうか、その影響はないだとか、やっぱその赤ちゃんが楽に産道を通してこれるだとか」と、硬膜外麻酔を用いることのメリットを考え、安心して出産できたことがよかったと述べた。

4) 研究協力者の属性による体験の違い

上記の各体験内容を述べた褥婦の分娩既往を表2に示した。初産婦のみの体験内容は、〈予想外にお産になる〉と〈児への不安だった〉で両方とも個人特有の体験だった。初産婦の方が多かった体験内容は【陣痛を体験】で、遠慮や除痛に対する思い違いで不本意に痛みを体験した2名は初産婦だった。経産婦のみの体験内容は、【余裕・冷静】、【産みたい感覚】、【産まれたことを確認】と〈助けなく子どもが出てきた〉だった。〈助けなく子どもが出てきた〉は、上子の出産時の体験と比較して述べられた内容だった。経産婦の方が多かった体験

内容は、【痛みの消失】と【児が出てくる視覚的感覚】だった。

各体験内容を述べた褥婦の出生時の児の体重による体験内容の違いはほとんどなかった。【産み出した実感のなさ】のみ、4名全員が3,000 g以上の児を出産していた。

今回の出産体験に対する捉えについて、「よかった」・「楽だった」内容で【痛みがなかったこと】を述べた7名のうち4名が初産婦、3名が経産婦だった。研究協力者の初産婦全員が【痛みがなかったこと】が「よかった」・「楽だった」と述べていた。【体が楽だったこと】を述べた3名は全員が経産婦だった。【元気に子どもを産めたこと】を述べた3名のうち1名が初産婦で2名が経産婦だった。3名の背景として、分娩経過の途中で胎児心音に異常が見られたり、前回の出産後に児がNICUに入院した経緯があったり、高齢出産である状況があった。

表2 体験の内容による初経別

体験の内容	初産婦数	経産婦数
【痛みの消失】	1	3
【余裕・冷静】	0	2
【待つという体験】	4	3
【陣痛を体験】	3	1
【痛みをコントロール】	3	3
【産みたい感覚】	0	2
〈予想外にお産になる〉	1	0
【児が出てくる視覚的感覚】	1	4
【産み出す行為】	3	4
【児が出てくる身体的感覚】	3	4
〈助けなく子どもが出てきた〉	0	1
〈児への不安〉	1	0
【自分で産んだ実感】	1	1
【産み出した実感のなさ】	2	2
【産まれたことを確認】	0	3

Ⅳ. 考 察

1. 痛みのない出産をすること

女性が自分の出産体験に満足することは、出産後の母親役割への移行をスムーズにし、母子相互作用に良い影響を与える^{10) 11)}。本研究協力者10名全員が硬膜外麻酔を用いた出産をよかった・楽だったと述べ、自身の出産体験を肯定的に捉えていた。本研究では研究協力者自ら分娩方法として硬膜外麻酔を用いた無痛分娩を選択している。硬膜外麻酔を用いて分娩した産婦にとって、麻酔に伴う処置や制約よりも痛みがないことが重要で、痛みを制御できたことの満足感が高いとの報告があるように¹²⁾、本研究でも、【痛みがなかったこと】がよかったこととして7名が述べており、痛みがないことが出産体験の重要な要素となっていた。自ら痛みを伴わない分娩方法を選択し、希望どおりに痛みなく出産できたことで、出産体験を肯定的に捉えることができたと思われる。

【体が楽だった】と3名が述べている。痛みを感じることによって交感神経が活発になり、脈拍や呼吸数の増加や、血圧の上昇、筋肉の緊張といった生理的反応がおこることで身体的な疲労をおこす。同時に、痛みに対する不安や恐れによって精神的にも疲労するため非常に体力を消耗する。痛みによる体力の消耗がなかったことが、【体が楽だった】ことに関連していると考えられる。また、「すぐに子どもの世話をすることができるくらい体が楽でよかった」と、単に自分の疲労が少なかったことだけでなく、すぐに子どもへ目を向けることができたことを述べ、早期に気持ちを育児に向けることができていた。体力を消耗することなく出産したことで、自身の産後の回復に気を取られることなく、すぐに育児に取り組むことが可能であると考えられる。これは、早期に育児技術を獲得することにつながり、スムーズに母親役割への移行ができるのではないかと考えられた。また、【体が楽だった】ことを述べた3名全員が経産婦であることから、育児をしていくイメージができていたことと、すぐに上子の世話をする必要があるという状況から、このような捉え方になったのではないと思われる。

2. 硬膜外麻酔を用いた出産における産む感覚と実感の有無

硬膜外麻酔を用いて無痛分娩をした産婦の多くは、胎児の下降感や、いきみたい感覚、子どもが膣や会陰を通過する感覚など、多くの身体的感覚を体験していた。子どもが自分の膣や会陰を通過する感覚、いわゆる胎児娩出感は、擬態語を使用して「ニュルン」、「ドロツ」、「ズルズルズル」と、児が出てくる感覚を豊かに表現されており、痛みがないぶん得られる身体感覚もクリアになるのではないかと考えられた。堀田²⁾は、胎児娩出感を持った女性12名のうち11名が、産んだ実感を得たと述べている。しかし、本研究では、【児が出てくる身体的感覚】を体験した女性は7名と多いにもかかわらず、【自分で産んだ実感】を語った女性は2名であり、4名は【産み出した実感のなさ】を語っていた。【自分で産んだ実感】を述べた2名は共通して、「感じる収縮の感覚だけを頼りに」、「意識したら」、「今かなあって思って」と、自分の収縮の感覚を意識していきんだり、いきむタイミングを試行錯誤するなど、いきむタイミングを自ら得ようと試みていた。一方、【産み出した実感のなさ】を述べた4名は、「感覚ないのに」、「タイミングが分からない」など、子宮収縮の感覚が分からず、分からないまま指示通りにいきんだことや、「ちょっと出てるって言った時も全然分からないくらい」と、得ている感覚、もしくは状況が分からなかったことを述べていた。これらより、産んだ実感を得るためには、子宮収縮など身体的感覚を分娩進行の状況と結び付けて意識できるかどうかに関連するのではないかと考えられた。

また、鏡を使って子どもの頭を視覚的に確認し、子どもが自分の体から出てきている様子を見たり、産声を聞いたりしたことで児が産まれたことを確認していた。Rubin¹⁵⁾は“陣痛中にスコポラミンを投与されたり、分娩時に全身麻酔を受けた女性は、自分が分娩をしたということ、もう陣痛が終わったということ、もう痛くないということを実感するのが難しい。この女性が陣痛・分娩という出来事の終りと、産褥早期・新生児期という出来事の始まりに対して記憶を埋めなおすために、十分な証拠を整理するまでにはしばらくかかりうる。”と述べている。児娩出の前後に視覚や聴覚によって出産した事

と、分娩経過中に体験したことを自分の出産体験として取り込んでいくために必要な行為であるといえる。

以上より、硬膜外麻酔を用いた出産を体験する女性に対して、自分で産んだ実感を持つことを促す援助として、子宮収縮などの感覚が自分で意識できるように、産婦が得ている感覚を聞きながら腹壁の緊張と一緒に確認したり、その感覚を産婦が分かりやすいように表現し、分娩経過の状況が分かりやすいように産婦に関わる必要がある。また、様々な情報から児娩出の確認ができるように、児が出てくるところを視覚的に確認できるように鏡の使用や体位を工夫すること、また児の啼泣に意識を向けられるような声のかけ方や配慮などをする必要がある。

3. 痛みを体験すること

痛みのコントロールについて、協力者の多くが、痛みを知覚したタイミングで自ら訴えて麻酔を追加し痛みをなくしていた。なかには、不本意に痛みを体験した産婦や、「我慢できる間は、それも感じていいかなっていうのもあったかも」と、許容範囲内の痛みを感じた体験を述べ、陣痛に伴う痛みの体験を希望する対象者がいた。産婦は陣痛体験に何らかの意味を持たせて捉えていることが報告されているが¹³⁾、本研究では、陣痛に伴う痛みを体験したい気持ちの具体的な内容は明らかにできていない。無痛分娩を選択しながら、陣痛による痛みを体験してみたい気持ちの内容や、痛みを体験したことが、その産婦にとってどのような捉えになっているのかを調査することで無痛分娩を選択する妊産婦へのケアを考える一助になる可能性があると考えられた。

4. 研究の課題と今後の課題

本研究は、正常経過をたどる妊産婦が多い1出産施設のみからデータの収集を行ったが、硬膜外麻酔の使用方法がさまざまであることから、多様な施設を対象とし対象者を増やしてデータを精練する必要がある。また、今回の研究で得た結果から、無痛分娩中の産婦も様々な身体感覚を捉えていたことが分かった。この身体的な体験に焦点をあて、その体験を詳細に明らかにすることで、必要なケアが検討できると考える。

V. 結 論

1. 麻酔導入後、分娩第1期の体験は、明らかに痛みがなくなった【痛みの消失】や、痛みがなくなったことによる【余裕・冷静】を体験していた。多くは【待つという体験】と、【陣痛を経験】、【痛みのコントロール】をしていた。
2. 分娩第2期は、【産みたい感覚】、【児が出てくる視覚的感覚】、【産み出す行為】、【児が出てくる身体的感覚】、【自分で産んだ実感】、【産み出した実感のなさ】、【産まれたことを確認】を体験していた。
3. 【産みたい感覚】、【児が出てくる視覚的感覚】、【産み出す行為】、【児が出てくる身体的感覚】といった、

児が出てくる感覚や産み出す行為が、【自分で産んだ実感】につながるわけではなく、子宮収縮などの身体的感覚を分娩進行の状況と結び付けて意識できるかどうかに関連するのではないかと考えられた。

VI. 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただいた研究協力施設の院長様をはじめ病棟スタッフの皆様、研究協力者の皆様、ご指導いただいた工藤美子先生、山本あい子先生、鶴飼和浩先生に心から感謝申し上げます。なお本研究は2009年度兵庫県立大学大学院看護学研究科修士論文を一部加筆・修正したものである。

引 用 文 献

- 1) 國清恭子, 斎藤やよい. コントロール感覚からみた産褥早期の母親の出産体験の分析. 日本看護研究学会誌. 30(1), 2007, 67-77.
- 2) 堀田久美. 胎児娩出感をもった女性の分娩体験. 日本助産学会誌. 17(1), 2003, 15-24.
- 3) 野口真貴子. 女性に肯定される助産所出産体験と知覚知. 日本助産学会誌. 15(2), 2002, 7-13.
- 4) 長谷川ともみ, 笹野京子, 堀井満恵, 塚田トキエ, 三日市麻紀子, 海老江卷子, 酒井和子, 佐藤あい子, 古柄紀子. 産褥婦の分娩後の喪失と対処に関する質的研究. 母性衛生. 41(1), 2000, 53-64.
- 5) 堀内成子, 近藤潤子, 石井ひとみ. 福地彰子帝王切開分娩における母子相互作用に関する研究(第2報)ー帝王切開分娩産婦の心理的喪失体験の分析ー. 周産期医学. 17(3), 1987, 429-435.
- 6) 横手直美, 永田真弓, 宮里邦子. 緊急帝王切開で生児を出産した女性の『母親としての再起』の認知プロセスー産褥1週間における主観的体験の質的分析ー. 母性衛生. 46(4), 2006, 617-624.
- 7) Katie L Halls. Maternal satisfaction regarding anaesthetic services during childbirth. British Journal Of Midwifery. 16(5), 2008, 296-301.
- 8) Slavazza KL, Mercer RT, Marut JS, Shnider SM. Anesthesia analgesia for vaginal childbirth. Differences in maternal perceptions. J Obstet Gynecol Neonatal Nurs. 14(4), 1985, 321-329.
- 9) 関島英子, 斎藤益子, 木村好秀. 麻酔分娩が出産の満足度と胎児感情に及ぼす影響. 周産期医学. 35(5), 2005, 651-655.
- 10) 佐藤ゆき, 加藤忠明, 伊藤龍子, 他. 出産満足度と育児中の母親の不安抑うつとの関連. 小児保健研究. 67(2), 2008, 341-348.
- 11) 竹原健二, 野口真貴子, 嶋根卓也, 他. 出産体験がその後の女性に及ぼす心理的な影響. 日本公衆衛生雑誌. 56(5), 2008, 295-305.
- 12) 竹原健二, 野口真貴子, 嶋根卓也, 他. 出産体験の決定因子ー出産体験を高める要因は何か?ー. 母性衛生. 50(2), 2009, 360-372.
- 13) 浅見万里子. 麻酔分娩と助産 現場で何が求められているか. 助産雑誌. 59(6), 2005, 474-478.

- 14) 東野妙子, 和田サヨ子, 武田とき子, 青木望美. 出産体験の振り返りによる陣痛体験の分析. 母性衛生. 45(4), 2005, 503-511.
- 15) Reva Rubin. 母性論 母性の主観的体験. 新道幸恵, 後藤桂子訳. 医学書院, 1984, p110-111.

The Experience of Mothers Giving Birth with Epidural Analgesia

KAMADA Natsu

Abstract

【Purpose】

The purpose of this study was to clarify the experience of mothers giving birth with epidural analgesia.

【Methods】

Semi-structured interviews were conducted to 10 women without history of treatment for complications, who received epidural analgesia while giving birth vaginally to healthy term infants. Those infants were not transferred to another hospital for emergency medical treatment. Informed consents were received before interviews. An inductive qualitative method was used for data analysis.

【Result】

Ten participants (average age, 32.5 years ; range, 29-39 years) included 4 primigravida, 5 unipara, and 1 secundipara. During first stage of labor after anesthesia induction, women felt significant “Relief of pain” and “Composure and calmness” due to relief of pain. Also, most experienced “Experience to watch”, “Experience of labor pain”, and “Control over the pain”. The experience in second stage of labor included “Eager to bear down”, “Visual sense of infant coming out”, “Action of bearing down”, “Physical sense of infant coming out”, “Actual feeling of giving birth on own”, “Lack actual feeling of bearing down”, and “Confirm the fact that infant was born”.

【Discussion】

For mothers giving birth with epidural analgesia, relief of pain seemed to be important factor to affirm their birth experience. Not losing ones’ strength made it possible to start infant nurturing right after birth. These results suggested that experiences leading to actual feeling of giving birth on own were not the sense of the infant coming out nor the action of bearing down, such as “Eager to bear down”, “Visual sense of infant coming out”, “Action of bearing down”, and “Physical sense of infant coming out”, but the action of bearing down by depending on the uterine contractions they feel.

Key words : Childbirth experience ; Painless delivery ; Epidural Analgesia